責任性の年代[1]（4）

ウィリアム・L. ヘンドリックス

（続き）

試案としての指針 数項目

以上のような複雑な諸問題に、一つとして単純な答えはない。とはいうものの、極めて実際的性格の次のような提言は、採るべき方策として しかるべき方向性にあると思われる。すなわち、

年齢そのものを考える以上に、責任性ということを真剣に顧慮する観点をより強調しなければならない　我々は 聖書の信仰が求めるところに照らし、一なる福音を 可能なかぎり簡潔なかたちで提示しなければならない。しかしながら、同時に その一方で、聖書が救いに必要と語る その一切が減じられてもならない。〔この意味で疑問視されるのが〕9 歳にも満たない子どもたちの問題で、神から根本的に離れていることが罪だとして、その罪故の希望のなさを 彼らが総じて表現しうるのか、また そもそもそうしたものを彼らが経験しているのかということ、それが大いに疑わしいことである。人は、自分が「迷い出ている」ことに気づいて初めて、「救われる」からである。

信仰の回心年齢を任意に設定するのは誤りである。が また、所定の年代に相応の能力を無視するのも、同様に誤りである　子どもたちは 間違いなく、各人の能力や生育環境により、それぞれに異なる年齢で成熟していく。加えて、回心の際、聖霊が個々人に働きかけるのも間違いない。こうしたことを考えるとき、責任性の年齢を一定のそれに任意に設定するのは不可能なことが分かる。と同時に、その一方で、年齢集団とその経験を扱った研究によれば、理解力がある一定のレベルに達しないと、抽象概念を把握することはできないことが明らかになっている。しかも、神が恵みの御業をなさるとき、人をその置かれた環境や持てる能力から切り離さずにそうされるということ、これもまた 人に対する神の関わり方の一つと言えよう。つまり、年齢と責任性の両方が考慮されねばならない、ということである。これはたしかに、我々に絶えず付きまとうジレンマではある。我々は、福音を宣べ伝え、子どもたちを回心へと導くためにあらゆる手を尽くせるよう、さらにも責任を持って 事に努めるべきだからである。

ただし、ここで押さえておかねばならないのは、我々がもし 伝道対象の有望な候補者を求めて、引き続き「幼稚科や小学科に侵入」し続けるとしたら、将来 深刻な問題を抱える危険性がある、ということである。なぜなら、我々はそうすることで、信仰者のバプテスマという しかるべき視点から遠ざかるとも言えるからである。

より良い、より密なカウンセリングプログラムを子どもたちに提供しなければならない

回心の体験というのは、人への神の関わり方は常にそうであるように、極めて個人的なものである。

そのため、我々は子どもたちをいっそう注意深く養い育み、彼らが恵みというものを経験できるようにしなければならない。例えば、罪意識の兆しとも言える表現を 子どもたちがするときがある。神から疎遠な自分を意識しつつあることを示すものである。我々はこのとき、罪の自覚を感じ始めたばかりのそうした子どもたちを強いて、備えのいまだできていない心理的に危険な情況に 当人を追い込んではならない。言い換えれば、子どもたちはほとんどの場合、経験を通して、しかも長期にわたってそうすることで 徐々に物事を学んでいく、ということである。罪を自覚し、しかしなおその自分が受け入れられていることを知り、そして回心へと導かれる瞬間というのは たしかに、ある特定の時点のことと言える。けれども、そうした時を強引にももたらそうとして、子どもを経験したことのない出来事に向き合わせたり、子どもに不可能なほどに福音の理解を徹底して求めたりすると、ひどく不幸な事態を招きかねない。

それは、当人が後年、自分の回心ははたして本物だったのかと疑念を持つようになるという意味で、不幸である。また、両親や教会の多くが、その子は「救われて、もう大丈夫」と考える一方、他の「候補者たち」にはプレッシャーをかけるという意味でも、不幸である。そのようにして、当の子どもはその後のガイダンスも提供されず、自分の体験について考えを深めることもないまま、放っておかれることになる。しかし、問題なのは なんといっても、そうしたプレッシャーは往々にして、回心体験に果たす聖霊の不可欠な役割を締め出してしまうことである。教籍上は教会員でありながらもはや教会には関わろうとしない人々のことが我々バプテスト教会の間で問題になっているが、以上の観点からも、それぞれの子ども一人ひとりにより多くの時間を割き、信仰への備えをなして 回心に導き、そして キリスト者としての成長を促すこと。そうすることが、我々の現状を正す一つの有効な手立てと考えられる。

バプテストは、神の契約として 子どもたちにその慈しみが向けられていることを神学的に認識し、これを強調しなければならない。それにより、幼い子どもたちを持つ両親の過剰な懸念を和らげる助けにすべきである　幼い子どもたちを持つ両親は、自分の子の救いについて、聖書が教えるところを超えて、理屈でなく気がかりになる場合が少なくない。すると、両親のそうした思いがその子に伝わることになる。そこで、当の子どもたちは親に喜ばれたい一心で、自分自身の理解如何（いかん）にかかわらず、期待されているところに応じるようになる。バプテストの牧師たちは 実際、我が子の霊的誕生を確実なものにしたいと願う両親によって、多大なプレッシャーに曝（さら）されることがある。例えば、両親のいずれかが次のように言ったとしたら、牧師はこれにどう対応すべきだろうか。「私はジョニーと一緒に暮らしていて、ジョニーのことはよく分かっています。私には分かるんですが、ジョニーは救われるばかりで、準備は出来ています。でも、先生がちょっと、ジョニーとお話ししてくださったら、と思うんですが・・・」

ちなみに、こうした「ちょっとしたお話し」というのは 多くの場合、時間にして 10 分もかからない。同時に このとき、当の子どもの信仰的体験について 牧師が気乗りしない態度を示すと、両親の多くは憤慨する。一方、それを追認するようにして応じると、自分たちの思いが他の人によっても確かめられたと、両親に受け止められる。このような実情からして、バプテストの牧師たちは説教に

おいて、具体的に子どもたちについて語るべきであろう。彼らが神の前においてどんな存在なのか、そして救いに必要な最低限のこととは何か、について語らねばなるまい。このようにして、こうした特定の諸問題が講壇から論じられるのを、またすべての回心に通じる聖書的基盤が注意深く教えられるのを、子どもと親の双方が耳にするなら、決断をするにより良い素地となるにちがいない。

牧師、伝道者、子ども担当者、神学者の間で対話を行なわなければならない　人生を歩むというのは いつの時も常に、理想と現実との間で、また理論と実際との間で緊張がある、ということである。これは、子どもらに関わるバプテストのリーダーたちの間においても同様に真実と言える。すなわち、若者たちが自身の宗教経験をめぐって その青年期に深い情緒的諸問題に直面する現実を前にし、南部バプテストはしかるべき調査検討を行なう必要に迫られているのである。救われるとはそもそもどういうことなのか、と。そして、幼い子ども時代に回心した者たちについて、その入信年齢と体験内容を吟味評価する必要に迫られている。

それゆえ、バプテストの諸教会で今現在 積極的に教会生活をおくっている人々について、その回心年齢を統計的に明示できれば、事の議論に大いに役立つことが明らかになろう。初期の体験のうち、後(のち)に深刻な疑念にみまわれ、それを経て回心経験に至った割合はどれくらいか、も参考になる。ただし これは、こうした我々の経験を理由にして 聖書的基準を変えるべき、と提唱するものではない。実際、そうした変更は常に、逆方向に進められるべきだからである。

いずれにせよ、我々になしうる、また我々がなすべき一つのこと、それは「責任性の年代」という考え方について、関係者や経験豊かな人たちと共に調査検討をする、ということである。牧師、伝道者、子ども担当者、そしてバプテストの神学者たちが共々、忌憚(きたん)なく、互いに認め合いながら、この問題について語り合う必要がある。

結 語

「責任性の年代」という考え方に確たる聖書的答えがあるわけではない。なぜなら、それは 聖書が問う問いとは明確には言えないからである。聖書の諸資料が確実に提示しているのは、救いには何が必要とされるか、その基準である。したがって、取るべき賢明な道筋は、救いについて聖書が意味するところを充分に保持できるよう、それを損なう我々の実践を正すことと言える。責任性の時とは、恵みの瞬間である。キリストを良しとするのか、それともキリストを拒むのか、人が聖霊によってその決断へと向かわされる時である。このとき、聖書の御言葉(みことば)を告げること、聖霊の導きを頂くこと、そして 個々人が自(みずか)らを神に預けることが必要になる。この瞬間が起こりうるまで、人は子どもたちを神の御手(みて)に委ねることを許されている。実のところ、我々は幼い子どもたちに対し 過ぎた責任を問う一方、しかし、キリストへの信仰をすでに告白した大人(おとな)たちには それを充分にしていない。それが実態と言える。

（了）

訳 注

1. 原文の英語表記は "The Age of Accountability" で、今風な表現で直訳すれば「説明責任の年代」とでもなろうか。"accountability"（アカウンタビリティ） とはそもそも "accountable"（アカウンタブル） という語から来た言葉（名詞形）で、"accountable" の意味合いについては、OED（*Oxford English Dictionary*）が "liable to be called to account, or to answer for responsibilities and conduct" "responsible" と、また OAD（*Oxford American Dictionary*）も "required or expected to justify actions or decisions" "responsible" と、その解説を記している。つまり、自（みずか）らの責務や行為、決断について しかるべき説明をなし、それを妥当なものとして弁明することが求められ、期待されているということ。それが "accountable" の基本的意味合いであり、"accountability" はこれを名詞化したものとなる。

　本訳稿では、こうした含意を押さえつつ、と同時に 表現を分かりやすくするため、タイトルを「責任性の年代」と訳出することにしたい。

2.〔　〕書きは、説明追加のための訳者の挿入。以下、同様。

3. 上記「訳注 1」を参照。

4. 本小論は Clifford Ingle, ed., *Children and Conversion*, Broadman Press, 1970 に、その第 6 章として所収されている。

5. 新共同訳では、「神にかたどって・・・」。

6.「3：16〜18」の誤植か？

7. 上記「訳注 4」を参照。

8. 古代ギリシアの哲学者 プロタゴラスの言葉、「人間は万物の尺度である」を援用して表現したもの。

9.「霊知」とか「覚知」と訳される。

10. 本書が刊行されたのは 1970 年であり、その時点から見て「前世紀末前後の先達たちに比べて」ということ。すなわち、20 世紀後半の時点で、19 世紀末から 20 世紀初めの先達たちと比較していることになる。

11. いわゆる「他行（たぎょう）会員」「長欠会員」等。

（矢野 眞実訳）